

“しがじん”はみんなのねがいをつなげるために全国障害者問題研究会(全障研)滋賀支部が発行しています。障害のある人、障害のある人に関わる人たちみんなのつながりをつくり、広げていきたいという願いから生まれました。

# しがじん

No.17  
TakeFree  
2019.1

全障研では、障害者や家族の願いを大切に、すべての人の発達を保障するための研究や調査活動を行っています。各地の取り組みを交流しつつ、一人ひとりが研究活動に主体的に参加しています。

あなたもぜひ、全障研にご入会ください。  
詳しくは、下記までお問い合わせください。

## Topics



自画像？

## 新しい事務局メンバーを紹介します！

新しく事務局メンバーになりました、仁村菜月子です。

昨年度より滋賀県内の養護学校の小学部で働き始め、教員生活2年目になりました。まだまだ分からないことばかりで、周りの先生方や子どもたちからたくさんのことを学ぶ毎日です。

昨年度、クラスの子どものとかわる中で、「もっと子どものことや発達について学びたい」という思いで全障研の研修に参加し始めました。そのころの私は

子どもたちの「できない」ことばかりに目を向け、その支援方法を考えていました。しかし、様々な方からお話を聞く中で、子どもたちのありのままの姿に目を向けることや、「できる、できない」だけでは評価できない子どもの内面の育ちの大切さに気付くことができました。自分だけでは気づけなかった視点から物事を考えられるようになり、子どもと過ごすことに楽しさを感じられるようになりました。日々子どもと過ごす中で、行きづまることがありますが、そのたびに全障研でいただいた資料や、みなさんから聞いたお話を見返しています。いつも私に元気をくれる、全障研に恩返しする気持ちでこれからがんばっていきたいです。

全障研滋賀支部へのお問い合わせは

(事務局 能勢ゆかり 090-4903-9808)まで

全障研滋賀支部



## も・く・じ

- \* 新事務局員紹介 ……1
- \* 第2回学習講座報告 ……2
- \* サークル活動紹介 ……4  
長浜養護、三雲養護  
八日市養護、不老泉
- \* 滋賀の障害児教育の歴史  
Vol.4 ……7
- \* 全障研全国大会報告、本の紹介など ……8

## 第2回学習講座

# 親のねがい、きょうだいの思い

去る12月1日(土)の午後、野洲のコミュニティセンターで学習講座を開催しました。報告します。

### いろいろな人に頼り、誰かと一緒に子育て

親の立場からは、おがわフランソワさんが、息子・しょうちゃんにくわえて、その“きょうだい”である「お姉ちゃん」についてもお話してくださいました。しょうちゃんが自閉症だと分かってからは、「好きなことでできたという思いを育てる」という方針の療育を選び、手作り台車を見て「楽しそう！」が決め手で養護学校を選んだおがわさん。また、「やりたいことはやる！やらないことは全くやらない！」というお姉ちゃんには、「学校以外のお友だちも作ってもらおう！」と、意識してキャンプなどの活動に誘い、しんどさを乗り越える第三の世界を作っておられます。それぞれの子どもたちと向き合って一人の人間として尊重し、それぞれにとって何が必要か、何を大事にしてあげたいかを丁寧に考えておられるのがよく伝わってきました。それができるのは、「親にもガス抜きが必要」と自分自身も尊重し、「いろいろな人に頼って誰かと一緒に育てよう」というおがわさんの素敵な考え方あってこそなのかなと思いました。



### 障害のあるきょうだいがいたからこそ

仁村さんは、きょうだいの立場から、7つ下の弟さんとのことをお話してくださいました。「障害児のきょうだい」としての葛藤や苦悩があまりない」ということ自体をコンプレックスに思う複雑な心境や、そうは言っても、クラスメイトからの言葉でショックを受けた経験、学校の授業などで「障害」を扱うときには行きたくなかった気持ちなど、率直に話ってくださいました。親亡き後のことや「結婚するとき嫌って言われたら…」などの不安はありながらも、弟さんがいたから今の自分があると思っているし、今は、社会人になって弟さんとおでかけできるようになった日々を楽しんでいきたいと話しておられました。

### 障害を受け入れる社会の構築を

きょうだいの立場からはもう一人、増田さんが一つ上のお兄さんとのことについてお話してくださいました。小学生のときに友だちから馬鹿にされたことで“障害のある兄”を意識するようになり、思春期にはマイナスな気持ちもたくさんあったと話してくださいました。そんなとき、お兄さんの元担任の先生が開いたバーベキューで、お兄さん以外の障害のある人と出会い、自由に楽しむオープンな雰囲気を感じ、そのあたりから少しずつお兄さんのことも肯定的に捉えられるようになったといいます。兄の存在、平等に接してくれた親の存在、そして上記の先生の存在があって、今の自分があると話してくださいま



した。やまゆり園の事件にも触れられ、犯人の考え方は絶対に間違っているけれども、そうなるかもしれない危うさから立ち直らせてくれるのは、障害を受け入れてくれる社会ではないかと仰っていました。

「障害児の親・きょうだいだから、みんながこう」では決してないからこそ、今回の学習会で、3人の方々一人ひとりの率直なお話が聞けて、とても良い経験になりました。(赤星 香早)

## 感想をいただきました

▼自分の兄に障害があるので聞いていて共感することが多く、自分の昔の頃の気持ちを整理することもできた気がしました。素直な気持ちを聞くことができ来てよかったです。

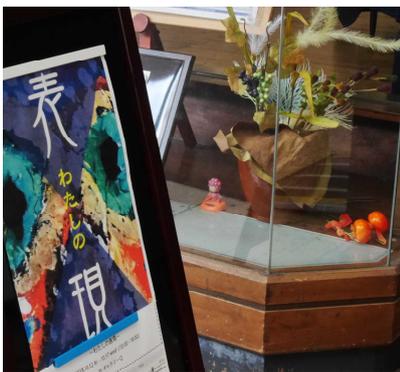


▼私にもしょうがあるきょうだいがありますが、自分のなかに未消化な部分がまだまだあるように感じました。“しょうがい”を含め、その人をその人として肯定的に受けとめている人や場のあることが、本人やその家族にとって大切だなと改めて感じました。本人、家族にとって大切だなと改めて感じました。本人、親、きょうだい、きょうだいの家族、それぞれの思いを実際にどういう家族のあり方のつなげるのか、とても難しいことも改めて感じました。ありがとうございました。



▼障害のある子の親として自分の子のきょうだい以外のきょうだい児さんのお話を聞いて良かったです。人それぞれの考えがあり、それぞれの生き方があって当然で、でも話を聞いていて、親もきょうだい児も本人にもそこには愛があって、それぞれが思い合っていることを感じられました。将来についての不安についても障害のあるなしに関わらず共通の悩みなんだと。理解して頂ける人を増やしてあちらこちらでも声を掛けてもらったり、親として出来ることとして愛される存在になれるように子どもを支えていきたいと再認識しました。

次回の講座は、2019年3月2日(土)を予定



### 「わたしの表現展」報告

秋のはじめ、すがすがしい空気が変わる頃、おおつ福祉会「わたしの表現展」に行ってきました。昔ながらの町屋が並ぶ商店街の一角で、買い物や散歩がてらにふっと立ち寄りたくなるたたずまいの、周囲の雰囲気ですっと溶け込んでいるような展覧会でした。オール・ブリュット、アウトサイダー・アート、エイブルアート等々、障害のある人の表現活動が耳目を集め、様々なメディアで取り上げられるようになって久しいのですが、ある種の仰々しさを感じて、逆に敷居の高さを感じてしまっていたのは私だけでしょうか。「この

絵を描いたのは、こんな人かなあ」「しばらく会っていないけど、きっと彼らしい日々を過ごしているんだろうなあ」などと、勝手に想像をめぐらしながら、自然に表情が緩んでくる展覧会でした。

『障害者問題研究』の最新号(11月発刊)の特集は「表現活動と発達」です。様々なジャンルの表現活動を通して、表現者本人にとっての主体的な意味を問うていく内容になっています。ぜひ、手に取ってお読みください。

(白石恵理子)





滋賀支部には、職場サークルの他にテーマサークルがあることは前回のしがじん第16号でもお伝えした通りです。そして具体的なサークル活動の様子についても紹介しました。

今回は、その第2弾！

3つの職場サークルの様子と9月23日に行われた「不老泉」での報告をお伝えします。

## 長浜養護学校サークル

### 「自分たちの実践から学び合うことの重要性を再確認」



長浜養護には全障研のメンバーが5人います。

5人だけのサークル活動だと寂しいので、若い先生から通りすがりの先生まで（これは本当の話）、呼びかけはわりと広く行っています。たまたま5人全員が組合員だったこともあって、組合の教研と気軽にコラボしたりもしています。

サークルを立ち上げた当初は、毎月第〇週の金曜日にサークルを！と決めてみたこともありますが、なかなかうまくいかず、今は、集まれそうな時に集まれる人で、気楽にやっています。研究部の全校研で白石恵理子先生や松島明日香先生に講師で来ていただいた時には、研修会後も残っていただき、その日の夕方からサークルを持ち、教研レポートの検討や日々の実践での悩み等への助言をいただいています。先日は事務局長の能勢ゆかりさんにもサークルのためだけに講師に来ていただき学習会を持ちました。

学習会というと、深く学びたい！とつい力が入ってしまっていて、ウキウキしちゃって、でも中身は講師の先生に頼ってしまうところが大きくて。また次も来ていただく♪なんて思っていたところ、印象的だったことが。「長浜養護の今年の子どもについて、長浜養護の今年の教員が語り合う」ことの意義について意見が出されたのです。



長浜養護の日々の実践を作っていく上で、自分たちで、自分たちの実践から学びあうこと、大切ですね。。ということで、講師の先生方からの学びのチャンスも引き続き大事にしつつ、次のサークルの持ち方を企画しているところです！（浦嶋真由美）



# 三雲養護学校サークル

「忙しいときこそ、しんどいときこそサークルを！」

「発達について学びたい!!」、「日々の仕事の悩みを聴いてほしい!!」という声をもとに2017年に再起した全障研三雲サークル。サークル名が決まらないまま1周年を迎えようとしています。ただ、ありがたいことに今年度も“細々と”ではありますが、活動を続けることができています。そして、この2学期からは、忙しいから…、しんどいから…と、なかなか開催できていなかった現状を打破すべく、“忙しい時こそ・しんどい時こそサークルを!”を合言葉に、月に1回の定期開催に踏み切っています。人が集まらなくても…。いや、1人でも来てくれたなら開催しようかな…。

そんなこんなの三雲サークルですが、9月のサークル活動と10月のサークル活動では、滋障教（組合）の先生方と手を取り合い、共同企画として、実践レポート報告&検討会を開催しました。中学部の若手の先生が書き進められている実践レポートの報告を聴き、学部を越えて若手からベテランまで活発な意見交流が行われました。意見交流の最後には、肩肘張らず“子どものことを語り合える場”の大切さを参加者みんなで共有することもできました。たったの4人で再起させた三雲サークルですが、活動を続けていく中で大きな集団へと成長しつつあります。全障研の会員に限らず、多くの先生方に、参加してもらえるようになった今だからこそ、もう一度“子どもを中心に考える”ことの大切さを確かめていけたらと思います。(長友 志航)

# 八日市養護学校サークル

「活動再開をめざして！」



八日市養護学校サークルは、以前は定期的に活動していましたが、ここ1、2年は集まりたい思いはあるものの…なかなか集まることができずにいます。今回は、こんなサークルができたらいいなあーと思うことを書いてみようと思います。最近の学校の実状としては、子どもを見送ってからの放課後は、会議がつまっていて、子どもたちのことをクラスの先生と話す時間もほとんどなく…授業のことについてもなかなか話せず…話そうと思うと退勤時間の17時以降という状況です。私は、教師の1番の楽しみであり、やりがいのあることは、授業づくりだと思っています。そして、子どもの小さな成長やいろんな姿を教師同士で話し合ったり、共感し合ったりするのが教師にとって至福の時間です。そんな日々の実践や子どもの姿を語れる場が作れたらなあと思います。

また、毎日子どもと接していると、「今日の関わり方はよかったのかな?」「今日の授業は、うまくいかなかったなあ…」「あの子はどう思っていたんだろう?」など悩みは尽きません。そんな悩みを気軽に話せて、そしてみんなで考えていけるような場を作りたいです。その際には、「みんなのねがい」を活用したり、専門的な講師の先生を呼んだりして発達保障の観点からも考えられるようにしたいです。そんなほっこりできるようなサークル活動ができればなと……。

こう書いてみて…やっぱりやってみようという気持ちが湧いてきたので、今年度のどこかでサークル活動再開します！（柴田宇希美）

# テーマサークル『不老泉』

しがじん 16 号で紹介したとおり「不老泉」は、特別支援学級の実践を交流するために結成されたテーマサークルです。活動の中心は、特別支援学級の関係者ですが、特別支援学校の関係者も参加しています。今回は、特別支援学級と特別支援学校の実践をつなぐ側面ももつ就学相談について、特別支援学校の立場からの報告でした。

## 「特別支援学校で行われている就学相談の現状と課題」

多くの特別支援学校で、教育相談等を担当している教員が、通学エリア市町の「総合的判断」を行う委員会（特別支援教育推進協議会などといった名称：以下「委員会」）のメンバーとして委嘱され、就学相談業務を行なっています。その具体的内容は次の通りです（A市町の場合）。

まずは各校園に出向き、対象児童・生徒の観察や事前相談を行います。観察時、市町の要請に応じて発達検査も行います。事前相談では、担任等から校園での生活状況、学習状況、保護者の意向等を聴き取り、就学の方向性について情報交換します。その後、観察時の様子や聴き取った事柄を踏まえ、どのような情報提供を行えばいいのかチームで論議し、夏休みに実施される「就学相談会」に備えます。

「就学相談会」当日は、就学前児童については、主に保護者の意向に応じて、今後考えられる就学先の情報提供を行います。小学校高学年以上のケースは、できる限り本人の意向も聴き取り、わかりやすく情報提供を行います。ただし、本人に責任を押し付けるような話の進め方にならないよう留意します。就学相談会後は、これまでの情報を整理し、答申文書の検討と作成を行います。答申文書は9月上旬頃、各校園に発送されます。

各校園では送られてきた答申文書を参考に、保護者とやりとりしながら就学先を絞ってくださっています。就学先決定については、市町教育委員会より2学期中（条件によっては、9月中とか10月中）に絞って欲しいという要請があります。

「委員会」の答申（総合的判断）と本人・保護者の意向（実際の就学先）が異なるケースもあります。その場合、在籍する校園と就学先の学校、市町教育委員会とやりとりする中で、着地点を見定めます。相談員が意見を求められることもあります。

問題意識として、観察場面（検査）の結果は、個人内の強みや弱みを見つめ、その後の発達、学習をうながすために活用すべきと考えていますが、就学相談の場では「通常学級に適合するか否か」の物差しとして活用されてしまう場合があります。さらに、発達にアンバランスさがある場合、より個人内の弱みに焦点があたり、本人の実力に適した学習の場や内容が論議されにくい時があります（特に集団適応が難しい場合）。適応できないことを子ども側の責任としてとらえるなど、通常教育側の課題もあるように思います。

また昨今は、重い障害のある子どもが地域の学校に就学するケースが増えています。地域の学校で生き活きと過ごせることができるよう、「就学先」の検討で終わることのない継続した支援について考える必要もあると感じています。

（東海 淳）





## びわこ学園と重症児の就学権保障①

「オムツをしてでも学校に行きたい」(1967年)といいながら16才の若さで逝ってしまった吉田厚信君。その遺志からびわこ学園の就学権運動が始まったと言われています。

しかし、びわこ学園の母体である近江学園は、1946年の設立当初から福祉と教育、医学との結合を重視してきた経過があり、開園当初から就学を保障してきました。それがなぜびわこ学園には引き継がれなかったのか。今回は、近江学園での就学保障の歴史とびわこ学園設置に至る経過について報告します。

### 一人ひとりに応じた教育の保障を求めて・・・

近江学園は、開園当初から子どもたちの就学を保障してきましたが、その形態は独自のものでした。なぜ独自の形態をとるようになったのか、その経過について昭和 25 年 2 月に提出された監査書類に次のような記述があります。

「精神薄弱児の場合、白痴、重症痴愚を除外するとしても特殊教育を必要とする児童をその態勢を有しない一般の学校に大量に通学させることは必ずしも當を得たものではないと考えられます。」「この様な現実の要請から開園以来特殊な義務教育を事実上学園の内部に於て実施してきた」。

しかし、引用文の冒頭にも「白痴、重症痴愚を除外する」とあるように、重い知的障害のある子どもたちに対しては特別な考えがあったようです。

前述の監査書類の別項には「一般に精神薄弱児施設は法に規定しているように社会性を陶冶する事がその教育目標でありますので、白痴重症痴愚以外の精神薄弱児は普通児と共同生活をいとなみ、具体的な社会生活の訓練を受けることが精神薄弱児にとっても普通児にとっても相互に有利有益であることは論を俟ちませんが、ここに閉ざされた自己の世界のみにしか有しない白痴痴愚を混在せしめることはそのほかの児童にとっても必ずしも得策であるとは言い難く、むしろその非社会性の本質の故に有害であるとすら言えましようし、また白痴痴愚自身にとっても必ずしもよい環境であるとは称しがたいのであります」とあり、重い障害のある子どもたちに対しては「彼等はそれとして特別な保護の環境を社会が整えてやってそこでほとんど無自覚な彼等が安心して生涯を遊び暮らせるようにすること以外には解決の方法はないと言っても過言ではありませんまい。」と専用施設の必要性が強調されています。そして実際に同年 5 月には、重い知的障害のある子どもたちのための落穂寮が設置され「学園にいた 13 名の白痴たちが移り、さらに県内の待機していた白痴達のうち 7 名だけが収容されて合計 20 名」での生活がスタートしています。文章だけを読むと、当時一般的であった重度知的障害のある子どもには“教育ではなく保護を”といった二者択一的な考え方のようにも読み取れますが、決してそうではなく、開園当初から独自の教育の形態を作り上げてきた近江学園の「一人ひとりに応じた教育の必要性」を具現化したものだったと考えられます。実際、近江学園以外から落穂寮に入寮した子ども達の多くが入所と同時に学籍を取得しています。

その約 3 年後、近江学園内に今度は重複障害のある重度知的障害児たちの「杉の子組」がつけられます。この子達はそれまでの学園生活の中で「手のかかる子どもであり、眼のはなせない存在であり、医学的にも生活的にも要注意人物であった。そしてこの子たちの存在が担当の保母をふりまわし、疲労困憊させ、遂には手を上げさせた」(福祉の思想 糸賀一雄) いわゆる『厄介な存在』であり、杉の子組結成は、「その困った子どもたちを一ヶ所にあつめたい」(同) という消極的なものでした。しかし、この杉の子組での体験が、その後、びわこ学園の建設につながっていきます。(次号へつづく)

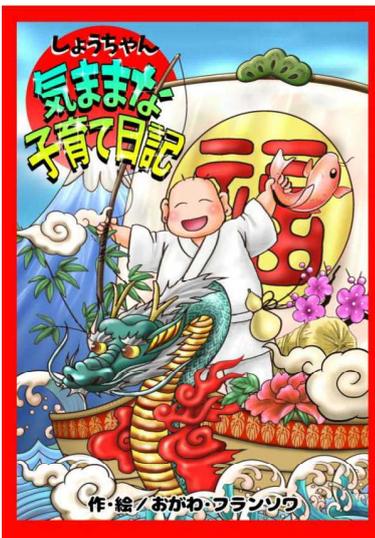
# 全障研第52回全国大会に参加して

「わたしのねがい みんなのねがい だれもがいのちがやく未来へ」をテーマに埼玉県川越市で開催された第52回全国大会。まさに酷暑の今年の夏に相応しい、暑く熱い埼玉の大会でした。

ウエスタ川越ホールでの全体会。オープニングのみんなが主役だ！「どンドン囃子」基調報告 全障研常任全国委員会、重点報告「障害者権利条約を巡る動向」に続き、文化行事—構成劇「川越ここがわたしの街」。地元、川越いもの子作業所で働く人たちの生き生きとした豊かな舞台。いもの子では、働く人たちを“メンバー”と呼んでいるそうです。職員、家族等多くの支えている人々に愛され、尊重されているからこそ、自由にのびのび生き生きと舞台での表現活動を楽しんでいるのだと実感しました。会場から沸き起こる拍手の嵐がそれを証明してくれたように思いました。

大会歌「もっと大きくなりたい」も最高でした。2007年の埼玉での第41回全国大会で作られた歌で、その後も県内各地の特別支援学校などで歌い継がれてきた歌は、ぼくもみんなも大きくなりたい、大好きという、ぼくの子どものねがいを大切にするという発達保障の視点を持った歌詞に何よりも歌いやすいシンプルなメロディーだからこそ歌い継がれているのだと思います。

記念講演は、障全協副会長の新井たかねさん。「学びあい 育ちあう仲間は かけがえのない財（たから）」をテーマに、障害のある娘さん（現在、いもの子作業所のメンバー）、との歩み、障害者運動のとりくみ、今後の課題として福祉労働の地位の向上、圧倒的に不足している暮らしの場、社会への発信と公的責任を求めていくことを優しい口調ではあるが、大きなハキハキとした声で参加者ひとりひとりの心に響くような迫力のある講演でした。（黒田恵美子）



## 本の紹介 ほんのしょうかい

「しょうちゃんママの漫画が『みんなのねがい』※1に載ってるよ！」と同僚が・・・ページを開くとあのかわいいしょうちゃんとママのキャラクターがそこにいた。これまでも、ママが全障研大会に持って行くレポートのなかに登場していたキャラクター！？だけに、それがひとつの読み物になって登場し感激！そして、今回その連載がこの一冊の本になり「めっちゃうれしい～」

草津養護学校に勤務していた時、隣のクラスにいたのがしょうちゃん・・・入学当初から「砂場のおうじさま!？」で、その砂遊びはどンドン作品といえるすごいものになっていき、しょうちゃんがおおきくなるのを砂場でみせてもらった。しょうちゃんのいる砂場をみるのがたのしみでほっこりできた。一方、担任の先生達は砂場のしょうちゃんに寄り添いながら、しょうちゃんとのやりとりを試行錯誤していた。だから、ママはもともと大変な日々だったと思う。学校で出会うと、いつも笑顔とあの声で私たち教員を元気にしてくれていたけれど、「気ままな子育て日記」を読んでいると、日常のなかで起こることに、ママもしょうちゃんもおねえちゃんも、お互いが絡まり向き合う家族の姿がある。「あ～あ」といいながら、そこに思いや意味が感じられる。とりあえず読んだら笑える泣ける、「子どもの思いをこう捉えたらいいのかも」というヒントがもらえる。何より、しょうちゃんとママのでっかいpowerが伝わって、ほわ～んとあったかくなる。（よしだせつこ）

※1「みんなのねがい」全国障害者問題研究会が発行している月刊誌

購読のお申し込みは、全障研滋賀支部へ